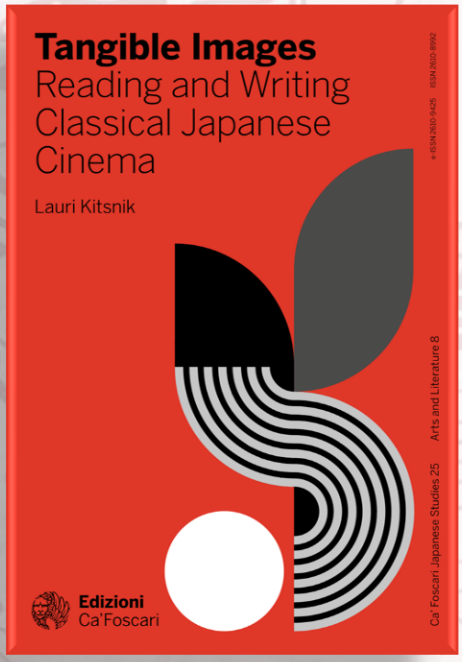
「書かれた映画」を読む

― 脚本家が動かした日本映画 ―

講師 ： キツニック・ラウリ

1978年エストニア・タリン生まれ。東京大学大学院言語情報科学専攻修士課程修了後、英国ケンブリッジ大学大学院東洋学部東アジア研究科日本研究専攻博士課程修了。博士（日本学）。セインズベリー日本芸術研究所ロバート＆リサ・セインズベリー・フェロー、京都大学大学院人間・環境学研究科外国人特別研究員・日本学術振興会PD、広島大学大学院人間社会科学研究科人文学プログラム准教授を経て、現在、ヴェネツィア大学アジア・北アフリカ研究学科准教授。



『触れる映像――黄金期の日本映画を読む・書く』
（ Edizioni Ca’ Foscari・ヴェネツィア大学出版社、2024）

QRコードから全文をご覧いただけます →

◆日時
2026年4月22日（水）
15:00－16:30
◆会場
大会議室（文学部1階）

〈講演概要〉

日本映画研究はこれまで、監督・俳優・ジャンルを中心に語られてきた。本講演では、スタジオ・システムが最盛期を迎えた1930～60年代に焦点を当て、映画制作において重要な役割を果たした脚本家の存在に注目する。

脚本が連載や出版を通じて流通したことで、「読む映画」として受容された歴史をたどりながら、著書『Tangible Images: Reading and Writing Classical Japanese Cinema 触れる映像――黄金期の日本映を読む・書く』（Edizioni Ca’ Foscari・ヴェネツィア大学出版社、2024）の主要な知見を紹介しつつ、無声映画期の初期脚本からトーキー以降のマスターシーン・スクリプトへと至る脚本形式の変遷や、脚本執筆における物質的・構造的変化をたどる。さらに、シナリオ文学運動や脚本のアーカイブ的価値、ジェンダー、共同執筆、シナリオ・ハンティングといった論点を通して、脚本家を創造の中心に据え直し、日本映画の創造と受容を新たな視点から考察する。

担当：藤城孝輔（kosukefujiki@hiroshima-u.ac.jp）
主催：広島大学比較日本文化学プロジェクト研究センター／比較日本文化学分野